

題目：交換形態が社会的連帯に及ぼす影響

氏名：稲葉美里

指導教官：高橋伸幸

集団や集団メンバーとのつながりは社会的連帯と呼ばれる。社会的連帯によって人々は社会的な問題に協同して取り組み、解決することが可能になる。そのため、社会的連帯は社会秩序の重要な構成要素の一つとして考えられ、社会的連帯に関する研究が数多くなされてきた。しかし、集団内でどのようなプロセスを経ることで社会的連帯が生じるのかについては明らかになっていない。本研究は社会的交換を行うことが社会的連帯を生むという視点から、社会的連帯の生成プロセスについて検討した。

社会的連帯は社会的交換を通じて生じるという主張は Lévi-Strauss(1949, 1969)にはじまる。Ekeh(1974)は、社会的連帯が促進されるのは社会的交換の中でも一般交換という形態を経験した場合であると主張している。この Ekeh の主張に対していくつかの研究が行われているが、どのような交換が社会的連帯を生じるのかは明らかになっていない。そこで、本研究では一般交換を含む 4 つの異なる交換状況を経験することで、社会的連帯にどのような違いが生まれるのかを実験室実験によって検討した。

実験は 6 人グループで行われ、参加者は資源の与え手と受け手が一致する限定交換 2 形態（交渉を伴う交渉交換と交渉を伴わない互惠交換）と、与え手と受け手が一致しない一般交換 2 形態（閉じた鎖の中で一方的に資源を与える鎖状一般交換と、鎖が存在せず自分で資源を与える相手を選択可能な純一般交換）の計 4 つの交換形態のうち、いずれか 1 つの交換を経験した。この交換セッションを経験する前後で社会的ジレンマゲームを行い、交換セッションを経験する前後での、社会的ジレンマゲームの協力率の差を社会的連帯の指標とした。

実験の結果、交渉を伴わない交換（鎖状一般交換・純一般交換・互惠交換）を経験することで、交渉を伴う交換（交渉交換）を行った場合よりも強い社会的連帯が生じることが示された。またその際、交渉のない交換を経験することが他のグループメンバーに対する好意や一体感などの連帯の心理的な要素を高め、高まったそれらの心理要素が社会的ジレンマゲームでの協力行動を促進していることが明らかとなった。

この結果は、社会的交換が社会的連帯を促進するかどうかは、交換形態が一般交換か否かによってではなく、交渉を伴うか否かによって決定されることを示している。